

土木計画学ワンデーセミナー19

「土木計画における公平論を巡って」

INFRASTRUCTURE PLANNING ONE DAY SEMINAR 19TH
EQUITY ISSUES IN INFRASTRUCTURE PLANNING

土木計画学研究委員会

Starring Committee of Infrastructure Planning Study

1. はじめに

さる 2000 年(平成 12 年)4 月 20 日, 21 日の両日にわたって, 土木計画学ワンデーセミナーシリーズ 19 「土木計画における公平論を巡って」が開催された。ワンデーセミナーシリーズは, 通常は 1 日で完結するが, 今回は 21 日がセミナー本編であり, 前日の 20 日は基礎概念や代表的な理論に関する予備講習という形で行われた。

地域政策・交通政策でのプロジェクト評価手法については, 省庁や自治体における指針の整備が進み, 実務でもようやく積極的な活用が行われ始めている。しかし, 現行の指針のほとんどが効率性規範に基づいて限定的な範囲の効果項目だけを取り上げた古典的な費用便益分析にとどまっていると言わざるを得ない。そのため, もう一つの重要な社会的価値規範である公平性の観点から事業をどのように評価すべきかとの問題が, 実務的な場面で疑問点として挙げられることが多数ある。公平論についてはこれまでにも社会科学系あるいは人文系の学術分野で数多くの議論がなされてきたが, 決定的な合意は得られていない。そのため, 事業評価の実務の場面で活用できるような具体的な評価手法の開発にも至っていない。効率性以外の価値規範からの評価については政治的判断や(価値規範が必ずしも明確でない)総合評価に委ねるべきとの主張がなされたり, あるいは公平論自体についての十分な議論を欠いたままに終わっている場面もしばしば見られる。

公共事業を巡る国民的な関心の高い現在の状況において, 公平論の問題についての明示的な議論は避けられないと言える。価値判断の問題があるので広範な決定的な合意が得られることは期待できないものの, これまでの公平論を巡る多数の議論とその限界を理解するとともに, 事業評価の実務から寄せられる疑問点と突き合わせ, 現時点での議論を総括しておくこと

の意義が非常に大きいことは確かであろう。

2. 内容

セミナーは, 表-1 のような構成で進められた。

基礎コースでは, 公平論を含む社会的価値規範に関するこれまでの理論(上田, 福本)と計量的な厚生分析手法(福本)についての紹介がなされた。さらに, 近年の理論的な展開を踏まえて, 公平論が多様な価値体系の間でのせめぎあいで, 公平論を多元論として捉える見解(小林)が披露された。

セミナー本編では, シンクタンクと官庁の実務の立場から, 公平性が政策の立案と評価において重要課題であること, そして, それを取り入るための客観的手法の必要性(吉田, 菊川)が主張された。それに対して, 経済学研究者の立場から, 財政学における伝統的なマスグレイブ主義が紹介され, 効率性達成のための政策と公平性達成のそれを厳しく峻別すべきであること(八田)が主張された。さらに, プロジェクト評価においては, 公平性規範を排除すべきとの強い主張(金本)も行われた。

このような対立する見解が披露された後, 公平性を含む社会的価値規範を計量的に推定する試み(福本)と, それを踏まえて個別事業の評価で公平性を考慮する修正費用便益分析の試み(長谷川)が紹介された。それらは未だ試験的な段階にあるものの, 具体的な数値を見ながら公平論について合意形成を図るために意欲的な取り組みである。

以上のように, 本セミナーでの各報告は, お互いに対立する見解を含んでいた。また, 紹介された見解や手法も, 社会的意思決定のどの段階を想定しているかという点で異なっており, 相互に整合し得るものであるかどうかは確認されなかった。これらの相違点は参加者からの質問/コメントを受けて進められた総合討議(森杉他)においても再度認識された。

表-1 セミナープログラム

公平論が価値判断を含む論題であるため、もとより、総合討議において報告者および参加者の間で鮮明な形で合意される結論が得られることは期待されていなかった。事実、披露された見解の中身については、対立は以前よりも先鋭化されたとさえ言える。しかし、報告者の感想として、個々の見解の中身を超えて、次の点が共通認識として浮かび上がったと思われる。

第一は、公平論が多元的な価値体系のせめぎあいであるという認識である。本セミナーで対立する見解が多数披露されたこと自体がこのことを示している。第二は、お互いに対立する価値体系であるからこそ、それぞれの価値体系がよって立つ基盤、そして、それから具体的な政策的含意が導かれる過程が明確に示されなければならないことである。情緒的な見解は、それが公理的アプローチに耐え得るものに整理して提示されない限りは、他の対立する価値体系と同列に議論される資格を持たない。第三は、公平論が多元的であるからこそ、常にコミュニケーションを絶やしてはならないことである。特定の価値体系だけが無批判に卓越する状況を作り出してしまうことはきわめて危険である。無論、これらの点については報告者の感想であり、セミナーの講師と参加者全体の見方を代表するものではない。

3. おわりに

公平論という話題は、これまで土木計画学の中でその重要性が強く認識されながらも、真っ向から取り上げられて集中的に議論される機会がなかった。今回のセミナーは、もとより、一つの結論を得ることを意図したものではなく、むしろ、本格的な議論をスタートさせたことに意義があると思われる。当日のセミナー趣旨説明(森地)では、離島振興などの公平論に関わる具体的な政策課題が多数示された。それらの課題を土木計画学の中で個別に議論する際にも、今回のセミナーで披露された様々な見解は有用であろう。

本セミナーで取り上げた各話題の詳細については、

4月20日(木) One day seminar のための基礎コース	
0-1 基礎コースの趣旨説明	上田孝行(東京工業大学)
0-2 価値論と評価の基礎概念について	上田孝行(東京工業大学)
0-3 社会的厚生分析の基礎概念	福本潤也(東京大学)
0-4 質疑	
0-5 社会的厚生の計量分析	福本潤也(東京大学)
0-6 公平論を巡る最近の理論的展開	小林潔司(京都大学)
0-7 質疑	
4月21日(金) セミナー本編	
第1部 公平論を巡る理論と実際の問題	
1-1 セミナーの趣旨説明	森地 茂(東京大学)
1-2 専業評価の実務からの問題提起	吉田哲生(三愛総合研究所)
1-3 新古典派経済学での公平論	八田達夫(東京大学)
1-4 道路整備の実務からの問題提起	菊川滋(建設省)
1-5 費用便益分析における効率性と公平性	金本良嗣(東京大学)
第2部 公平論の計量的分析	
2-1 地域間厚生格差の事後分析	福本潤也(東京大学)
2-2 修正費用便益分析の考え方	長谷川淳(三愛総合研究所)
第3部 総合討議	
3-1 問題提起・討論のキックオフ	森杉聰芳(東北大)
3-2 討論 上田孝行, 金本良嗣, 小林潔司, 吉田哲生, 八田達夫	

セミナーテキストをご参照いただきたい。また、テキストの内容は、一部は既に他の学術誌や報告書に掲載されたものである。それ以外の部分については、それぞれの講師の責任において、本セミナーの後にさらに内容を発展させて学術論文等として適宜公表される予定である。併せてご参照いただきたい。

最後に、本セミナーの講師、参加者および準備に尽力頂いた学会事務局の方々に土木計画学研究委員会およびセミナー実行委員会からこの場を借りて感謝の意を表したい。なお、本報告はオーガナイザーである上田孝行(東京工業大学)、実行委員である福本潤也(東京大学)の両名の責任でとりまとめた。

(2000.8.25受付)